
7of3

キリトLv100

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7 of 3

【Nコード】

N0431V

【作者名】

キリトLv100

【あらすじ】

2021年。

「彼」は普通の日常を送っていた。それは、「彼」にとって、とても退屈だった。だから、いつもある事を願っていた。

彼が願った事——非日常が来てほしい、という願いがかなった時、止まっていた針が、動き出す。

人嫌いな「彼」は、少女と仲間に出会い、共に生活し、はたして何を見出すのか。

Prologue (前書き)

プロローグなので、意味のわからないところがあるかもです。

あと、この小説を読んで悪くはないな、と思ってくれた方、キリト
1v100のページも見ただけならば幸いです。

それでは。

Prologue

2021年、日本。

全てが利便化され、理想が現実になった世界はなにか、大切な物を代償にした気がする。

それは自然でも、伝統的な文化でもなく。

もつとちっばけな、ものを。

でもそのちっばけなものが思い出せない。

何故だろう。何故――

「それじゃ、行ってくる。」

俺は、現在高1。

成績も運動も中ぐらいで、特徴のない寂しい人だ。

「よっ。」

朝から寝ぼけてるんじゃ、学校で大変だよっ！」

なんて言ってくれる彼女は当然いるわけもなく、1人寂しく自転車をこいで、学校へ向かう。

耳にヘッドホンをつけ、赤信号を無視して走る俺を、非難の目で見
るおじさんやおばさんたち。

そんな景色を眺めているうちに、学校についた。

教室に入ると、先に学校に来ていた級友に、あいさつをされる。

それを返して、いつも通り教卓の目の前の席に座って本を読み、退
屈な授業を受けて家に帰る。

友達との会話がほとんどない……。

そんなことは、自分でも分かっている。

確かに、他の人から見たら、寂しく見えるかもしれない。

個人面談でも、担任の先生にいつも友達を作りなさい、って言われ
る。

俺は別に、1人でいることが大好きな人じゃない。

ただ、

面倒くさい。

それだけだ。

人と関わるためには、仲良くなるためには、他人にあわせなければ
いけない。

そんなこともないって？

確かにそうかもしれない。

みんな優しくて、楽しいかもしれない。

だけど……。

それは、ほんの一握りの奴らだけなんだ。

家については、読書をしたり、ゲームをしたり。

そんなありふれたことをやりながら、俺は眠りにつく。

だから。

俺は、非日常を求めている。

そして俺は非日常を願い、不思議にもその願いはかなった。

いや、かなってしまったと言うべきか。

なんでそう言うのかって？

そりゃ、今の俺が、普通の、昔の生活に戻って欲しい——そう思うからだ。

——1時間前

「あの空飛んでる飛行機みたいなやつ、なにかな？」

私は、友達にそう聞きながら、集中してそれを見た。

おかしい。飛行機なら5機も横に並んで飛ばないはずだ。

「んー？そんなの見えないよ。詠架ちゃん、大丈夫？」

「いや、あそこらへんに……あれ？見間違いかなあ。」

「詠架ちゃん。確かに最近は少し物騒だけどねー。学年主席に、UF〇がいた！みたいな事言われたら、反応に困るよー。」

「見間違い……なんだろうね。ごめんね、心配かけちゃって。」

「全然大丈夫だよ！それより、早く学校に行こう！」

親友に心配をかけないように、笑って少し歩くスピードを速める。私が動揺している事を、悟らせないように。

ついに、きてしまったのか……。

——同じく1時間前の別の場所

「あれは……」

俺は学校に向かって歩いていて。その時、数秒見えたものがあつた。「なあ、今空に5機位何か飛んでなかった？」

その問いには誰も反応しない。通学路で言つた一言だから、誰も気

にとめないのは当然と言えば当然なのだが、それにしても

「誰も、見てないのか？」

妙に反応が薄すぎる。通学途中の学生がたくさんいるのだから、空を見上げたり思案顔になっている奴が1人くらいいても良いのではないか。

「俺の幻覚、か。」

そう判断して、学校に向かった。

彼はまだ知らない。

同じ時間に、同じようなものを見た少女がいる事を。

t o b e c o n t i n u e d

Prologue (後書き)

初めまして。またはお久しぶりです。

キリトlv100です。

実は、この小説にはある思い入れがあるんです。

それは、……次回のあとがきに。

最後に、友達と読んでくれた全ての方に感謝をこめて。

ありがとう。次回も宜しくおねがいします。

0・5章 不可視の技術（前書き）

この物語は、

「フィクション」です。

使用されている国名、地名等は、一切現実と関わりはありません。

0・5章 不可視の技術

インビシブル・テクノロジー「不可視の技術」

？物体を色の3原則から外れた色で彩る技術

？周りの色に同化する能力を持つ物体を作る技術

俺は学校について、SHRが始まるのを待っていた。

一応、近くの席の奴に、さっきみた物体について聞いてみたが、

「知らないし見てない」

というような返答しか帰って来なかったので、さっき見たのは俺の幻覚であることがわかった。

眠い……。

程よい教室の気温が、俺を気持ち良い睡眠に誘ってくれる。

よし、寝よう。

そう決意して、机に突っ伏した瞬間、放送が入った。ぴんぽんぱんぽーん、という穏やかな音とは裏腹に、事を伝え始める声には緊張が含まれている。

「緊急連絡。緊急連絡。ただちに全クラステレビをつけ、次の指示があるまで待機しててください。」

緊急連絡なのに、テレビをつけるのか？

テロでもあったのか？

そんな声があちらこちらにあがるのをよそに、俺は一抹の不安を抱きながら、テレビまで歩いていった。

このわからない謎の不安をどうにかしたい、そんな軽い気持ちで、テレビの電源を押す。すると――

想像を逸する非日常へと俺らが吸い込まれた事を、画面の上部に流れているテロップが、無情にも伝えていた。

緊急ニュース

中国が、2週間後に日本へ宣戦布告する事を明言。

教室は静まり帰った。

教室にいた誰もが、あり得ない、という顔をしていた。俺も、放送局の陰謀かと思った。だから、他のチャンネルに回した。

だが、結果は変わらない。全ての放送局で緊急のテロップが流れているのを見た時、俺は、

あの飛行物体は、

戦闘機もしくは偵察機だ。との確信に至る。

一呼吸おいて、

「うわあああああああ！」

級友の怒号や悲鳴が、クラス中に響きわたった。

自宅待機。

青ざめた担任は一言、そう言つと足早に教室から去っていった。

どうやらあのニュースは事実らしい。

「ってか、何故中国は急に宣戦布告してきたんだ……。」

校庭を歩きながら呟く。

返答を期待した訳ではなかったのだが、

「そりゃ、インビシブル・テクノロジー絡みじゃないの？」

答えが帰ってきた。

声が出た方向をふりかえると、そこには、

「嘘、だろ……。」

学校をおおっほどの大樹がはえていた。校庭のど真ん中に。そして、その根本に声の主はいた。

「初めまして。いや、久しぶりかな、……。君とは。」

「昔会ったことあるよね的な雰囲気出されても会ったことないんだが。てか今俺の名前わからなかったよな！？まあ、それよりも聞きたいことがある。」

「ふーん。」

その言いぶりだとあなた、この樹が見えるのね。

ちなみに一応言っておくと、この大樹、私のはやした訳じゃないわ。私はあなたと同じで、この樹が見えるの。ただそれだけ。」

「この樹が見える……？」ふと周りをみまわしてみる。

そうか。朝感じた違和感は、

「みんなには、見えてないんだな。」

つまりは、俺とこいつだけが見える。そういうことだろう。

「そうよ。何故かはわからないけど。」

私の考えでは、この樹は、インビシブル・テクノロジーが活用されているわ。あなたが今日の朝見たのもそう。」

「インビシブル・テクノロジー……。確か、それが完成したっていうのは噂でしかないんじゃないのか？」

インビシブル・テクノロジー。それは、日本が完成したと言われているが、真偽は明らかになっていない。

「詳しい事はわからないわ。だけど、私とあなたが見えているのに、他の人には見えない。」

なら、不完全なインビシ——長いからこれからはこう言っわ——不完全な”不可視の技術”だと考えるのが合理的じゃない？」

確かにこいつの言うことは筋が通っている。

「まあ取り敢えず一番最初の話に戻すと、中国が日本に宣戦布告する表向きの理由は領土問題、つまりは尖閣諸島の所有権なんだけど、実際には、”不可視の技術”絡みだと思っわ。」

「”不可視の技術”か。そんなに恐ろしいものなのか？」

「うーん、あなたは透明人間になる事を想像した事はある？」

「いや、特には。」

「つまりは、核爆弾を使うと、人間の住める環境はなくなってしまう。だから、各国は核爆弾に代わる強力な戦力を必要としていたの。そして、目をつけられたのが、物を見えなくさせる技術……”不可視の技術”よ。爆弾や基地を隠せるなんて、都合良すぎるでしょ。」

確かに、そうだ。

そんな危険な点を全く見つけられない自分が歯痒い。

そして、この異常な程頭のきれるこいつは、

「お前は、」

何者なんだ？

その質問は、言い終わる前に先回りされて

「私は詠架。あなたの1つ上で、しかもあなたの先輩だよ。私の事は、詠架って呼んでね。」

屈託のない笑顔。いつもはクールな彼女の見せたその笑顔は、まるで、一輪の向日葵のよう。

詠架先輩。

謎が多いけど、悪い人ではなさそうだな。

「君は？」

意識を戻し、

「俺は、」

さわさわさわ

残りの言葉は、大樹のざわめきによって、かきけされた。

「そろそろ時間のようね。私は、死んだ父親の遺志をつぐね。だから、ここでお別れ。生きてなさいよ、絶対。約束だからね。」

そう言つと、詠架は俺と小指を絡めてゆびきりげんまんと言つと、引き留めるまもなく大樹の裏を駆けていった。

俺は、詠架が気になった。

特に――

別れ際、詠架が一瞬だけ見せた、寂しそうな表情に。

0・5章 不可視の技術（後書き）

2人は、再び出会えるのだろうか。

読んでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0431v/>

7 of 3

2011年10月7日03時27分発行